



第126号
 特定非営利活動法人
 環境パートナーシップちば
 TEL: 090-8116-4633
 E-mail: info@kanpachiba.com
 http://kanpachiba.com/

「SDGs達成のためのESD担い手育成事業」2018年度報告

NPO環パちばが、法人となり新しい事業として、地球環境基金の助成を受けて、「SDGs達成のためのESD担い手育成事業」を2018年度に実施しましたので、ご報告いたします。

6月25日に開催しました、この事業のスタートアップとしての「NPO環パちば パートナーズミーティング」については、だより122号でご報告させていただきました。その後の「地域版ESDプログラムづくり」7月、9月と、「SDGsを進めるプラットフォームづくり」8月、9月については、123号でご報告しました。いずれもご参照いただければと思います。 <http://kanpachiba.com/>

◆ 地域版ESDプログラムづくり

「地域版ESDプログラムづくり」は、9月よりファシリテーターとして石井雅章氏（神田外語大学）に協力いただき進めてきました。

11月26日に、グループ「地球温暖化・水・資源循環・生物多様性」ごとにプログラムのブラッシュアップの後、プログラムづくりから課題になった「学習者が習得できるESDの視点」について、全員で意見出しをしました。また、プログラムのフォーマットを全員で検討しました。

このフォーマットに各々が内容を入れて、1月21日にはみんなできりかえり、「ESDの視点を入れたプログラム」を更に検討しました。

◆ ESDモデルプログラムガイドブック

2月8日には「地域リーダーが作ったESDプログラムガイドブック」の素案出しをして、参加者が意見を出し合いました。これをまとめたものが今年度の成果物であるガイドブックになります。

このガイドブックの中の「ESDモデルプログラムづくりの流れとプログラムシートの読み方」で、ファシリテーターの石井 雅章 氏（神田外語大学）が、「ESDプログラムは与えられるものではなく、

目の前にいる学習者と持続可能な社会づくりを結びつけるために、自分たちで考え、実践しながら、更新していくものと言えます。」と書いておられます。

来年度実施を予定している千葉県北部のESD地域リーダー育成にもこのガイドブックの活用が期待されます。

◆ SDGsを進めるプラットフォームづくり

2月8日の第3回「SDGsを進めるプラットフォームづくり」では、「地域版ESDプログラムづくり」メンバーが活躍することが、SDGsの達成へ向けての一つであるという視点から、プラットフォームづくりを検討していただきました。

内容は、ESD人材育成事業の報告、ESD視点を入れたプログラム紹介の上で、ESD人材を活用し広めるために、プラットフォームの在り方、必要な要素、今後の方向について、ファシリテーター石井 雅章 氏に進めていただきました。

先送り（つけ）や、世代間の不平等の解決、主権者教育（社会をつくる責任）などのご意見や、今後検討メンバーの中に教育に携わる人に入っていくことや、自分たちにはできること、できないことのご意見もいただきました。また、異なる社会・文化を持つ視点からの気づきを共有する場となれば、というご意見なども、いただきました。

来年度実施を予定している「SDGsを進めるプラットフォームづくり」につなげていきます。

2019年度「SDGs達成のためのESD担い手育成事業」も、「地域版ESDプログラムづくり」と「SDGsを進めるプラットフォームづくり」の両輪で進めていきますので、引き続き、多くの皆さまのご協力をよろしくお願いいたします。

（文責：横山 清美）

「特定非営利活動法人 環境パートナーシップちば」 第2回(2019年度)通常総会開催のご案内

代表理事 桑波田 和子

環境パートナーシップちばは、平成9年に任意団体として設立し「市民、企業、行政等の主体などとのパートナーシップで環境保全を推進する」ことを目的に活動してきました。

任意団体として20年を経た後、平成30年1月25日に、『環境を軸として、持続可能な社会の実現をめざすために、各主体とのパートナーシップを推進する中間支援団体』として法人格を取得し、「特定非営利活動法人 環境パートナーシップちば」が設立されました。

平成30年5月19日開催の第1回(平成30年度)通常総会で承認をいただきました、30年度事業計画に基づき、法人としての目的を達成するために次の事業を行いました。

1. 持続可能な社会を目指すための多様な主体とのネットワークの構築事業
2. 持続可能な社会を推進するための人材育成事業

3. 環境活動の推進と充実を図るための情報の発信事業

つきましては、平成30年度事業報告、2019年度の事業計画をみなさまにお諮りしたく、以下のとおり通常総会を開催させていただきます。ご出席のほどよろしくお願い申し上げます。

今後とも、会員の皆様のご協力、ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

第2回(2019年度)通常総会開催

日時 2019年5月26日(日)
午後1時30分～3時
会場 千葉市文化センター 9階 会議室3
千葉市中央区中央2-5-1

*通常総会終了後、会員交流会を予定します。

*会員の方には、総会ご案内(議案、出欠確認など)を後日郵送いたします。

*議案などご確認の上、出欠のご返事(欠席の場合は委任状)など、ご対応の程よろしくお願い致します。

つなぐ人フォーラムに参加してみました

2月15～17日に行われた「第11回つなぐ人フォーラム」に参加しました。「つなぐ人フォーラム」は、毎年多くのジャンルの人たちが集い、互いの経験や知恵を共有して「よりよく生きたい」願いをつなげ、活動に変えていくイベントだそうです。会場は清泉寮、事務局は公益財団法人キープ協会が担当されていました。

参加者、実行委員、ツナギスト(実行委員が誘いする話題提供者)、ボランティア、事務局合わせ、総勢140名。受付後、開会式、オリエンテーションの後、1日目は10分プレゼンテーションが4会場に分かれ各7回(つまり28!)あり、10分ごとに次は何を聞こうか・・・と会場を移動。

3回目の10分プレゼン「なんとなくお坊さんになったひとのその後」で、ようやく自分の声を発することができました。知らない人の中に飛び

込むのは、なんて勇気のいることなのでしょう。

2日目は45分プログラムが6会場で各6回、どのWSも魅力的。「インタープリテーションをSDGsで考える」「自然体験はコミュニケーションに利く?～キープ協会の自然体験プログラム～」 「ハクブツムシ～研究者シュミレーション～」など36あるWSから選んだ6つに参加しました。

3日目は、会場全員で2.5時間WSを作ります。2日目の夜は、WSを作る相談で夜遅くまで熱く語る人がたくさん。本当の楽しさは、2.5時間WSを作り上げる中で生まれる化学反応だそうです。一緒にWSを作るなんてとんでもなく、参加するだけで精一杯でした。

知らない人と何を話していいのかわからない緊張も、どこか張り詰めた気持ちも、清泉寮でのおいしい食事も、夕食後の「つなぐBAR」も、すべてが新鮮な体験でした。(文責:広田 由紀江)

第12回 レスポンシブル・ケア 千葉地区対話集会に参加して 市原市町会長連合会 理事 姉崎地区会長 桃尾 英宣

第12回 レスポンシブル・ケア千葉地区地域対話集会
日時：平成31年1月31日（木）午後2：00～5：20
会場：市原市五井会館 4階 大ホール
工場見学：AGC（株）千葉工場見学 12：20～13：40

今回、姉崎地区町会を代表して「レスポンシブル・ケア 千葉地区対話集会」にパネリストとして参加させていただきました。

レスポンシブル・ケアとは、『化学物質を製造、又は取り扱う事業者が、自己決定・自己責任の原則に基づいて、化学物質の開発・製造から廃棄に至るまでの全過程にわたり、環境・安全面について自主管理を行っている化学業界の活動』です。

京葉コンビナート20社をはじめ、行政・町会長会・各種団体から186名の方が参加され、千葉県防災危機管理部 林 直人 氏から「大規模災害における千葉県の対応」についての講演を拝聴しました。

続いて、2社の工場長から「石油化学工場の環境安全・保安・防災」について事例・取り組み紹介がありました。休憩後、パネルディスカッションが行われ、企業、町会、行政から活発な意見交換がなされました。皆さんが一様に心配されているのは「事故発生時」どのような災害が考えられるのか？ 住民はどういう行動をとればよいのか？と切実な問題です。

3.11のコスモ石油の事故についてはまだ新しい記憶ですし、昭和40年代のコンビナート事故も住民は経験しています。実際、工場で勤務中に体験された人の話もありました。事故後、行政は法規制の強化を実施、企業はそれに対応しています。私自身コンビナート企業に40年以上従事し

た身です。お金の面でも工事の面でも大変だったことを記憶しています。企業の努力についての理解も必要だと思います。

思い出したことがあります。「無事故・無災害・無公害」という標語のバッチを作業服の胸につけていたことです。今では「公害」という言葉は使いませんが、地域住民にとっては不安があるのも事実です。

ともすれば、「地域住民対企業」と考えがちですが、企業で働いている人も、まさに地域の住民です。敵対した考えを持つ必要はありません。企業活動については、災害発生時も含めて、「正しい情報を素早く」住民に伝える活動を実践していただき、私たち住民は、誤った知見によらず「正しく恐れる」ことを実行したいと考えます。



レスポンシブル・ケアって何？

化学工業会では、化学物質を扱うそれぞれの企業が化学物質の開発から製造、流通、使用、最終消費を経て廃棄・リサイクルに至るすべての過程において、自主的に「環境・安全・健康」を確保し、活動の成果を公表し社会との対話・コミュニケーションを行う活動を展開しています。この活動を「レスポンシブル・ケア（Responsible Care）」と呼んでいます。

レスポンシブル・ケアの歴史は、1985年カナダで誕生→1989年国際化学工業協会協議会が設立→レスポンシブル・ケア活動の世界展開を開始。→1995年社団法人日本化学工業協会内に、日本レスポンシブル・ケア協議会が設立され、環境・安全・健康に関する活動を化学工業会全体で統

一・活発化されてきた。全国15地区で地域の行政や住民の方々と交えた地域対話が開催されています。※（一社）日本化学工場協会より

2年に1回開催され、千葉地区地域対話集会12回ということは24年間継続していることとなります。1月31日の開催内容は、千葉県の講演のほかに、(株)ADEKA、宇部興産(株)の事例・取り組み紹介がありました。パネルディスカッションのパネリストは、桃尾さんをはじめ4地区の会長、千葉県、事例紹介2社の工場長、今回の開催担当、住友化学(株)千葉工場長でした。

（文責：桑波田 和子）

親子でエコな省エネ料理教室／省エネチャーシュー

2月23日に、千葉市環境教育講座として、幕張本郷公民館で「親子でエコな省エネ料理教室」を実施しました。買い物～後片付けまでの行動の中でどうしたら環境負荷を減らすことができるのかを考え実践します。今回はチャーシューを作りましたが、どんな料理も調理プロセスを工夫すればエコクッキングとなることを説明しました。①ごみを減らす（野菜の切り方を工夫して生ごみを減らす）②エネルギーを大切に使う（保温調理を利用し、煮込み時間は10分）③水を大切に使う（流しっぱなしにしない、汚れを流さない）④旬の食べ物を使う、の4点に気をつけました。

日頃、このような調理実習の機会をいただくことは多く、作ったものを昼食にいただき後片付けをして解散となるのですが、今回大きく違ったのが「料理を持ち帰る」ということでした。その結果、全員がチャーシュー1本を煮汁とともに持ち帰ることになりました。多少の試食はするものの、ごはんなどを作ったり盛り付けたりする必要がなくなった分、保温調理にじっくりと取り組むことができました。

また、保温中に当時12歳だった日系カナダ人

のセヴァン・カリス＝スズキの地球環境サミットでのスピーチを見ることができました。27年前も今も地球環境の深刻さは変わらないどころかもっとひどくなっているように感じます。小学生のお子さんを含めた親子・大人20名の心にもスピーチは響いているようでした。「参加者からは、「笑いあり、真剣に考えさせられる部分もあり、日々に役立つ内容」と温かいコメントを多数いただき、担当として一安心したとともに今後とも頑張っていきたいと思いました。（文責：広田 由紀江）



「エコ・クッキング」講座に参加して

平成30年12月13日、東京ガス新宿ショールームを会場とした新宿リサイクル活動センターと東京ガスの協同講座「エコ・クッキング」に参加しました。「エコ・クッキング」とは東京ガスの登録商標（2000年3月17日登録、2020年3月17日存続期間満了）で、「環境のことを考えて買い物・調理・片付けをすること」。食はだれにとっても毎日欠かせないものでエネルギーを切り口に、五感も働かせながらおいしく作ることを目指します。

買い物では地元で旬の食材を選ぶ、調理では食材を無駄にせず、環境に優しい熱源を選び、エネルギーロスを出さないように省エネな調理法を工夫する。片付けでは、節水と水を汚さない、ごみをぬらさない。参加者のほとんどがベテラン主婦でしたが、講師から改めて基本的なことを丁寧に教わり再確認するのも、新鮮感がありました。

今回のメニューはオムライス、ホットサラダとチョコバナナスティックでした。フライパン一つで、ブロッコリーを蒸し煮し、薄焼き卵を焼き、玉ねぎとマッシュルームとハムを炒め、チキンブイヨンで炊いたご飯を使い、チキンライスを作ります。パプリカと、春巻きの皮にくるんだバナナ

とチョコを、水を張らない両面グリルで焼きます。

主婦歴の長い私たちも、講師に教わりながらの調理実習は新鮮で、あーかしら、こーかしらと初対面の人たちとにぎやかに楽しく調理を楽しみました。

食後に、グループごとに調理で使用したガスと水、生ごみの数量の発表がありました。エネルギー計測機付きのスタジオは、さすがです。今回は6人ずつ3グループでしたが、水・ガスの使用量は一割程度の差でした。

受講後も食への気付き、環境への取り組みが継続されているという追跡調査もあるようでした。

（文責：中村 明子）



身近な海、東京湾を見つめよう

温暖化防止うらやす 川島 謙治

3月2日、習志野市谷津干潟自然観察センター副所長 芝原達也氏の講演を、東京湾三番瀬に面した小学校跡地に移転したうらやす市民大学でお聞きしましたので以下のとおり報告します。

谷津干潟は2本の水路で東京湾とつながる長方形の干潟。かつて製塩や採貝で栄えた谷津海岸には、東京に近く海水浴や潮干狩りにでぎわう谷津遊園があった。干潟とは山から川を通じて泥や砂が堆積した海で最も浅い場所で、さまざまな生き物の生息地であるが、埋め立てられやすい環境である。千葉県では1960年代半ばから高度経済成長の波のもと大規模埋め立て事業が始まったが、谷津干潟は計画を知った地域市民の保護運動に加え、“大蔵水面”と呼ばれる国有地だったことによって“生き残った奇跡の干潟”といえる。

干潟に飛来するシギ・チドリは、東南アジアやオーストラリアで越冬し北極圏等で子育てするため長い距離を移動する。谷津干潟はその中継地として重要な役割を果たしており、1993年6月10日に国内の干潟では最初にラムサール条約に

登録された。この条約は渡り鳥でなく、湿地を守る条約で、登録がゴールでなく、登録後の維持活動が求められ、①保全・再生、②ワイズユース（賢明な利用）、③対話・教育・参加・啓発の取組みが重要。谷津干潟自然観察センターでは市内小学4年生の見学受入れのほか地域協働事業として、6月10日の「谷津干潟の日」に干潟観察他のさまざまな体験や参加の機会を提供し、ボランティア・ジュニアレンジャー・ユース制度による人の輪づくり等の取組みを行っている。

今、干潟に来る鳥が減少し、アオサやホンビノス貝の大量発生等の問題があり、保全とワイズユースの実践としてホンビノス貝の潮干狩り等に今後チャレンジしたい。

“海はまちの誇りとなり、生活を豊かにしてくれる”の考えのもと、谷津干潟につながる“生態系としての東京湾”に眼を向け、東京湾シギ・チドリ一斉調査や東京湾関連施設のスタンプラリー等を通じて谷津干潟とともに東京湾の保全に貢献していきたい。

親子でエコな省エネ料理教室パートⅡ／肉まん&スープ

2月に引き続き、「親子でエコな省エネ料理教室」が3月16日（土）幕張本郷公民館で行われ、前回と同様、広田、小倉、荒川の3名で伺いました。

今回は、肉まんとうすを同時に調理するというエコクッキングで、参加者は15名、うち3組6名が親子での参加、パパと娘さんの組み合わせの親子もいらっしゃいました。また、前回の講座に参加いただいた方も数名あり、エコクッキングへの関心の高さがうかがわれました。

最初に、エコクッキングについてレクチャーした後、限りある資源を大切に使うため、野菜の洗い方（たらいの中で汚れの少ない野菜から洗う）、野菜の切り方（皮もできるだけ使う等）の説明をしました。

調理開始後、まずは肉まんの皮づくりと並行して各種野菜を切り、餡(ア)を作りました。肉まんの餡を皮で包む作業は難しかったのですが、皆さんだんだん上達して、見事な出来栄でした。

その後、蒸し器の下段で大根をゆでながら、その蒸気で肉まんを蒸し、最後はそのゆで汁に溶き卵や野菜を足してスープを作りました（省エネ）。さらには、捨てることが多い大根の皮と葉できん

ぴらを作りました（生ごみ減）。どの班も、生ごみを極力減らすためには野菜をどこまで使うべきか考えながら調理をしていました。

試食・片付け終了後、班ごとに今回のクッキングで出たごみ（野菜くず、プラ容器など）の計量をし、一番少なかった班にサラダ菜一箱分を贈呈しました。また、参加した方々には、肉まん2個ずつ、ゆで大根、残った野菜を持ち帰っていただきました。当日を振り返りながら、ご家族と楽しく食べていただけたのではないのでしょうか。

（文責：荒川 薫）



モンレーベイ水族館～プラスチックフリーの取り組み～

娘家族が住むロサンゼルスから北へ約 500 kmにある、モンレーベイ水族館（Monterey Bay Aquarium）に出かけてきました。そこで、水族館が取り組んでいる、プラスチックフリーの取り組みの様子をお伝えします。

もともとはイワシの缶詰工場を水族館に改築し、1984年に開館したそうで、年間約 200 万人が来館する米国でも人気の高い水族館です。深海魚の研究としても有名だと聞いています。水族館では、海洋環境の保護をテーマに、目の前に広がるモンレー湾の自然をメインに展示し、生きものの暮らしが分かるよう工夫が施されていて、体験を通して子どもから大人まで楽しみながら学ぶことができます。

また、プラスチックによる環境汚染をなくすことにいち早くから取り組んできた水族館としても有名です。館内では、海洋プラスチック汚染の展示を広いスペースを割いています。プラスチックを使用して制作したオブジェや絵画なども展示され、人目を惹きます。

レストランやカフェでオーダーするコーヒーは、マグカップで提供されます。ジュースやソーダ類

はリユース可能なガラスのコップで販売され、スプーンもフォークも全部金属製でした。海洋を保護するために取り組んでいることへの理解も提示されています。ギフトショップでは、商品の包装プラスチックの包装を最小限にする努力も続いているようで、現在では、使い捨てプラスチックを使用している率は7%以下だそうです。

海の生き物をふんだんに見せてくれる水族館ですが、海洋保護への取り組みへのアピールも徹底していることは素晴らしいと思いました。

（文責：桑波田 和子）



太平洋に散らばるマイクロプラスチック

エコメッセ 2019in ちば出展募集開始

エコメッセ 2019in ちば 実行委員会
広報・交流部会 谷合 哲行

いよいよ改元とともに 2019年度がスタートします。エコメッセ 2019in ちばは、2019年10月20日(日)10時から16時まで幕張メッセ国際会議場を会場として開催されます。

今年は「みんなで取り組む SDGs」をテーマとして掲げ、参加・体験型のブースを集めた「SDGs体験パーク」を実現したいと思っています。ワークショップやものづくりなどの体験型のブース出展ができる団体の出展を増やしたいと思っています。

今年は例年より開催日が遅くなった分、途中の締め切り日も例年より遅くなり、早期申し込み期限 7月20日(土)、出展申し込み期限 8月20日(火)、出展者説明会 9月9日(月)です。詳細はホームページ (<https://www.ecomesse.com/>) をご覧ください。

昨年からテーマとして取り上げている「SDGs(持続可能な開発目標)」は、2030年に向けて世界が合意した17の目標と169のターゲットから

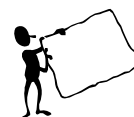
構成される国際的な目標であり、この1年で日本国内にもかなり浸透してきました。全ての人に関わる幅広いテーマ設定と、“2030年”という明確な期限により、具体的な課題と到達目標が明示されています。

昨年の出展団体に最も関係しているテーマを選択していただいたところ、SDGsの17テーマの中で14テーマが選択されました。今年は残る3テーマについても、実際に関連した活動をしている団体の出展を促したいと思っています。また、今年は各出展団体の”具体的な取り組み”が見えるイベントにしたいと思い、「SDGs体験パーク」と銘打って出展団体の募集を行います。身近で小さな活動でも、国際的な目標設定につながっていると再認識していただき、新たな一歩を踏み出せるきっかけとなる場になれば幸いです。

エコメッセ 2019in ちばへのご参加・ご出展、よろしくお願いいたします。

県内の環境保全活動人（団体）紹介 — 49 —

おききました！ この人・この団体



～アップサイクルでつなぐ環境循環と共感の輪～

WAcKA 代表 梶原 誠

繊維産業がもたらす環境問題、とりわけ新品衣料品の廃棄問題に着目し、その中でももっとも身近なアイテムであるTシャツのアップサイクル活動として「Tシャツから手芸糸にアップサイクルする」活動を行っています。

その生産工程において心身障害者福祉施設様との取り組みの元、我々ができるフェアトレードとして適正価格での発注を行い、生活困窮者や様々な理由で職に就けない方々への就労移行支援として生産工程の一部を依頼しています。

また『楽しく環境貢献』と言う参加型の形態を作るべく、アップサイクル糸を使った編み物ワークショップを開催し、3世代が集う場の提供、特に編み物を得意とするシニア、シルバー世代の方々が生き生きと活躍できる場の提供を目指しています。

Tシャツとしての価値を失い、ゴミとなるものに新たな命を吹き込み、その命を参加するみんなで育み、新たな価値を創造する。その活動を通し、物の大切さを学び根本解決を目指します。

プロジェクト開始のきっかけは長年繊維産業に従事し、バングラディッシュやベトナムでの駐在経験から体感した問題点とその原因が作る責任と使う責任にあることを知り、その両面から解決したい、また欧米諸国では既にさまざまな取り組みをスタートしていることから、その必要性を強く感じたためです。

繊維産業は世界中の化学物質の使用される割合が25%と言われており、環境汚染に与える影響が石油産業に次いで2番目に高く、海洋汚染に与える影響が最も大きい産業と言われています。

衣料品の主原料である綿花栽培では大量の水を使い、使用する農薬の影響により健康被害が発生し、児童労働なども問題視されています。繊維産業に従事する児童の数は1.7億人と言われています。

一方でアクリルやポリエステルなど合繊維などは洗濯する度にマイクロプラスチックが発生し、海洋汚染に影響を与えていると報告されています。製造工程において多くの問題を抱える繊維

産業ですが販売後にも問題があります。それは大量の廃棄です。

製造後1年以内に廃棄される量は全体の60%と言われており、売れ残りや不良品、低価格化に伴う短サイクルなどさまざまな理由により、世界中で年間210億トンの繊維ゴミが廃棄されています。

日本を含めた先進国で安全、安心、安価を求める欲求が後進国での労働負担を巻き起こし、ブランド毀損を守る動きが大量廃棄と言う行為に繋がり、環境負担に拍車をかけます。

私たち先進国での選択の仕方一つで後進国での児童労働、貧困といった社会問題や環境負担を改善することは可能です。

そのためには事実を知り、ライフスタイルの革新を行う必要があります。生活に身近な衣料品がもたらす環境破壊と労働搾取と言う後進国での問題をこの活動を通じて知って貰い、グローバルな視点で環境問題、社会問題に対する見識を広め、次世代により良い社会、自然環境をバトンタッチできるように、有効な資源活用と無駄の削減を実施できる意識を広めたいです。

また、この活動を通し、関わる人々が居場所、活躍の場を見つけ、各個人が自分の魅力、価値に気付く場を提供していきたいです。物だけではなく人の価値も高めるアップサイクル活動を行います。

WAcKA <http://wacka.jp/>

Tシャツからアップサイクルされた手芸糸



編み会

運営委員会報告

2月運営委員会

日時 2月14日(木) 15:00~18:00

場所 船橋市民活動センター

【報告】

- ・県環境講座 1/30 報告まとめ
2/25 こどもエコネット発送
- ・だより 125号 発送
- ・30年度“SDGs達成のためのESD担い手育成”事業 2/8
- ・その他

【協議】

- ・WAcKA梶原さんの活動内容ヒアリング
- ・31年度総会について 5/26
- ・31年度事業について
- ・(環境再生基金事業) 市民団体アンケート集計について
・だより 126号
- ・理事会 3/9 4/13 ・その他

3月運営委員会

日時 3月15日(木) 15:00~18:00

場所 船橋市民活動センター

【報告】

- ・県環境講座 報告書提出
- ・理事会報告 3/9
- ・だより 126号
- ・ESDガイドブック
- ・ニュースレター

【協議】

- ・31年度総会について 5/26
- ・団体アンケートまとめ
- ・ホームページ構成・コンテンツの検討
- ・その他

お知らせ

第8回 印旛沼流域圏交流会

日時 4月6日(土) 13:00~18:00(雨天開催)

会場 独立行政法人 水資源機構千葉用水総合管理所
(大和田機場) 会議室

主催 印旛沼流域圏交流会

内容

第1部 交流会 (13:00 ~ 15:00)

「印旛沼について思うこと、考えたこと、あれこれ」(仮題)

第2部 懇親会 (16:30 ~ 18:00) ※別会場

定員 40名

参加費 無料 ※懇親会参加(別途徴収)

参加申し込み 下記アドレスにメールでお申し込みください。

印旛沼流域圏交流会事務局:

inbameeting@gmail.com

申し込み締め切り 4月3日

※当日は大和田機場の春の一般開放が行われています
(10:00~15:00)

(仮称) 平成31年度浦安春祭り 環境フェア

日時: 2019年5月18日(土)・19日(日)

午前10時から午後4時(雨天中止)

会場: 浦安公園(浦安市役所周辺)

主催: 浦安市

内容: 市民活動団体、企業、自治体等によるブース
出展 ほか

参加団体: 「環境」にかかる活動等に取り組む市民
団体・企業・自治体

その他: 「カフェテリア in 境川」・「植木まつり」・「国際
交流フェスティバル」と合同開催

「特定非営利活動法人 環境パートナーシップちば」

環境活動の推進と充実を図るため、市民・団体・企業・行政・学校とのパートナーシップのもと、「持続可能な開発に向けた目標(SDGs)」や「持続可能な開発のための教育(ESD)」の視点を意識して、さらなる持続可能な社会の実現をめざすことを目的とする。

お問い合わせ

事務局: 〒262-0006 千葉県花見川区横戸台 21-13 特定非営利活動法人 環境パートナーシップちば

Tel: 090-8116-4633

E-mail: info@kanpachiba.com

http://kanpachiba.com/

※会費や会員申し込みなどの情報は上記 HP でご確認ください。